

3. 海外から留学生を受け入れることの意義

弦間正彦（早稲田大学社会科学総合学術院教授 国際部門統括理事）

本稿では、「海外から留学生を受け入れることの意義」に関して、早稲田大学の事例について説明する中で議論したいと思う。海外からの留学生は、自身が持つ文化、宗教、習慣、価値観、言語能力などを背景に、国内生とは異なったものの見方や意見を持っている。そして、新たな日本の生活環境と、キャンパスの内外におけるいろいろな体験を通して、世界中から集まる学生や教員、そして町で出会う多彩な人々から、生まれ育った環境と違った世界について学んでいる。このように、新たな学問を母国語以外の言語で学ぶだけでも大変なものにもかかわらず、いわゆる異文化体験も同時に積んでいるのが海外からの留学生である。

キャンパスに多様性をもたらす海外からの留学生

あまり海外と関わりがなかった国内生にとっては、留学生との出会いは、世界には多様な考え方と生活様式を持った人々がおり、それらが多様な国や社会をつくっていることを知るきっかけとなる。そして、異なる背景を持つ人と共存していくためには、コミュニケーションが必要であり、お互いの文化や社会、考え方について尊敬を持って理解を深めた上で、個人やコミュニティがお互いの交流を図ることが重要であることを、留学生にも国内生にも体得して欲しいと思う。このように、留学生は、国内大学にとって、減っていく国内の18歳人口を補う存在という消極的な存在ではなく、文化、宗教、習慣、価値観、言語の面から、大学キャンパスにおける多様性確保の一端を担う貴重な人材であり、その存在が長期的に日本を含む国際社会にもたらす効果は大きい。

多様性がもたらすイノベーション

新たなアイデア、価値や技術を生み出す力は、多様性の中に存在していることは多くの学術研究により証明されている。例えば、Jonesら（2020）は、その文献レビュー論文の中で、多

様な文化を包摂するチームは、想像力に富み、イノベーションを作り出してきたことを示した。さらに、多様性が新たなアイデア、価値や技術を生み出すためには、チームの多様性をもたらすリーダーシップやオペレーションを、組織の発展に合わせて変化させていくことが重要であり、チーム構成員には異文化理解能力が必須であると結論付けている。このように、イノベーションを通じた社会の発展に貢献できる人材を育成するためには、異文化理解能力が必要とされることから、キャンパスにおける留学生の存在は、大学教育の社会的効果を高めるためにも必要とされていることが分かる。

さらに、Ramasamy & Yeung（2016）は、文化が国のイノベーションに与える影響は明確であるが、これまでの研究は、同じ国の中においては文化が同質であるという前提で議論が進んできたが、民族と価値観という側面において多様性が国内にも存在するという仮説を立て、それらの多様性がイノベーションに及ぼす影響について検証した。民族と価値観という側面における多様性の影響は、その国のイノベーションの成果に顕著に表れ、民族多様性はイノベーションに対して負の影響を、価値観の多様性は正の影響を与えることが分かった。そして、民族が同質であるが、価値観が多様である国が、もっともイノベーションを生み出していることを示した。国内の民族の構成を意図的に同質化することはできないが、人々の持つ多様な価値観を尊重する政策を導入することは可能である。大学のキャンパスにおいても、多様な価値観の存在を理解した上で、皆が共生する持続可能な大学コミュニティの形成と発展を推進する施策を推進することが重要である。

Bolliら（2018）は、多数のスイス企業のパネルデータを用いて、教育レベルの多様性が企業のイノベーション活動に与える影響について検証した。垂直的な教育レベルの多様性は、

R&D活動の収益を拡大させ、新製品の創出にもつながることを示した。ただし、教育レベルの多様性とプロセス・イノベーション、研究開発の集約度、製品イノベーションの集約度との間の関連は証明できなかった。これらの結果から、垂直的な教育レベルの多様性は、発明段階における創造的次元を高める一方で、商業化プロセスには影響を与えないという結論に至った。大学発のイノベーションも注目を集めているが、異なった背景を持つ多様な人材が集う大学においては、発明が起こる素地は十分にあるが、必ずしも商品化に至らないので、商品化のためには別のアプローチをとる必要があることを示しているのかもしれない。

Zhangら（2020）は、ハイテク企業が持続的な成功を達成するには、活用型イノベーションと探索型イノベーションを同時に追求することが重要であることを示した。特許データなどのパネルデータに基づく実証分析では、産業の多様性は、企業イノベーションの活用型と探求型の両立を高める一方で、地理的多様性は企業イノベーションの活用型と探求型の両立を阻害することを明らかにした。大学においては、必ずしも両方のタイプのイノベーションを両立して生み出すことが優先されておらず、協働する産業や地理的多様性の重要性を考慮する段階にはないものと思われる。

文化の多様性とイノベーションの関係について、一国レベルで検証した事例もある。Guoら（2023）は、中国の省レベルのパネルデータを使い、転入者の戸籍や使用方言でみる文化の多様性と、特許申請件数で見たイノベーションの深化の間に統計的に正の有意な関係があることを示した。さらに、この関係は、30歳から50歳までの年齢層、もしくはイノベーションにつながる職業、もしくは競争的な市場において、もしくは内陸部において明確に表れていることが報告された。文化の多様性が生み出す技術的なイノベーションについては、一律に正の効果が表れないので、学生にはキャリア選択が、マクロで見た場合のイノベーション効果に違いをもたらすことを伝え、理解してもらうことが有用であると考ええる。

Huら（2022）は、Guoら（2023）と同様に中国を対象として、ただしより細分化した地域データを用いて、使用方言の違いを文化の多様性としてとらえ、それが対象地域のイノベーションに与える影響について検証した。そして、両者の関係には統計的に負の有意な関係があることを示した。さらに負の関係を軽減するためには、教育に対する投資を増加させ、外部からの資源の移転が有用であることを示した。文化の多様性が、より小さく区分された地域においてイノベーションを生み出すためには、教育に対する投資や資源の投入が継続される必要があり、大学を始めとする教育機関・組織の役割が重要であることを意味している。

Miller, D. & Z. Acs（2017）は、シカゴ大学（米国）の事例をとりあげ、20世紀の米国に存在した自由で創造的なアメリカン・フロンティアは、今は大学のキャンパスを取り巻いて存在する企業家経済（Entrepreneurial Economy）で置き換わっていることを示した。現在の大学キャンパスの起業家エコシステム（複数の組織が互いに連携し、それぞれの強みや資源を活かし合いながら、共に成長していく仕組み）は、利用可能な資産、自由、多様性を提供しながら機会を創出し、起業家精神と革新を促進してきていると論じ、キャンパスにおける多様性は、様々なイノベーションを生み出していることを具体的に立証した。大学は、このように社会や経済の革新・変革を生み出す仕組みの重要な一部に現在なっていることを示した。そして、新たな知的創造を、キャンパスにおける多様性が生み出しうることを確認した。

イノベーションを生み出す多様性の役割は、オンライン教育においても、同様に観察されるものであろうか。Usherら（2020）は、ナノテクノロジーの授業を、通常の対面授業形態をとる大学生チーム以外に、オンラインの授業形態をとった大学生チームと、MOOC（大規模公開オンライン講座）の授業形態をとった一般受講生チームに対して行い、それぞれのチームのクラスプロジェクトの成果を、学問分野、学術レベル、母国語の多様性との関連で比較した。学問分野、学術レベルの多様性は、これらの3つの

異なる授業形態のいずれにおいても、正の成果をもたらすことが確認できた。一方で、母国語における多様性は、対面授業においては正の成果を上げたが、両方のオンライン授業チームにおいては、負に働いた。これは母国語の多様性という留学生がもたらす正の授業環境変化においては、対面でない場合には、逆効果になってしまうことを示している。このように、キャンパスにおいて実際に留学生と国内生が共に時間を共有して対面で学習することは、教育効果を高めることから、重要である。

多様性にあふれるキャンパスにおける異文化理解の推進

留学生と国内生が集う大学のキャンパスは新たな気づきと価値創造の場であることを理解した上で、海外からの留学生と国内生の交流を促進することは、国際社会の持続可能な発展のために必要である。交流を積極的に進め、異文化理解を図るために、早稲田大学においては、Intercultural Communication Center (ICC) (異文化交流センター) が存在する。それは本部キャンパスの真ん中に、大学のダイバーシティセンターと共に存在し、さまざまな出会いと異文化理解の場を提供している。そこでは、海外からの留学生が共に活動する機会を毎週のように提供している。ICC (2025) によると、「ICCはすべての出身地・国籍の人を歓迎し学生同士の交流機会を提供している。学生が主軸となり様々なイベントを企画・運営している。世界の文化への理解を深めながら、新たな価値観や文化を生み出すことを目指し活動している。」大学組織である。

ICC の具体的な活動としては、1) 海外からの留学生と国内生を両方含む学生を中心としたさまざまな相互交流機会の提供と、2) すべての学生の異文化理解促進に資する情報の提供がある。1) 相互交流機会の提供については、「言語や文化のエキスチェンジ、社会・国際問題、音楽、ダンス、スポーツ、研修旅行などさまざまな形態のイベント」が学生の手を通じて企画・実施されている。交流は学生間に留まらず、さらに学生と教職員の交流、在校生と 68 万人の校友(同窓生)の交流、学生と地域の交流

を通した町おこしなどに拡大して行われている。

2) 情報の提供に関しては、学生の交流や情報収集の場となる ICC ラウンジを設けている。そこでは、早稲田大学で学ぶ海外からの留学生の出身国および日本の全 47 都道府県のインフォメーション・ボックスを設定している。さらに、世界各地の観光局などから取り寄せた資料や、利用者自身によって提供された各地の地図や観光案内などが閲覧可能となっている。ICC ラウンジは、旅行や留学先を考える上での、レファレンスルームとなっている。さらに、「ICC ライブラリー」もあり、各国の小説や写真集、コミックなど、利用者が持ち込んだ資料を閲覧することが可能になっている。さらに、インフォメーション・ボードをラウンジ内に設け、ICC 主催のイベント情報以外にも、学内外で開催される異文化交流・理解に関連する各種イベントやプログラムの情報提供を行っている。メールマガジンでは、ICC のイベントごとの案内以外に、毎週土曜日には日本語・英語両言語で「ICC サタデーニュース」を発信して、ICC 以外の組織・団体が主催するイベントや企画で学生が興味のあるような関連情報をお知らせしている。他大学の教員・文化団体などが企画するイベントも、学生にとっては貴重な異文化体験となると思われることから、広報の対象としている。

以上のように、留学生と国内生が様々な場で積極的に交流をすることが、大学における知の創造 (イノベーション) につながるので、大学としても出会いの場と異文化体験の機会を積極的に設けることが重要だと考えている。これは、早稲田大学だけでなく、他の大学においても普遍的に重要なことだと思う。

建学の理念と海外からの留学生の果たす役割

一方で、私立大学においては、独自の「建学の理念」が存在することから、留学生が果たす教育や研究上の役割は大学により異なる。吉崎 誠 (2013, P.19) は、グローバル人材に関して議論を展開し、導入できる含意として、「それぞれの大学の「建学の理念」を実現するなかで、各大学のミッション・ビジョンに合わせて、

どのような人材を育成していくのか、グローバル化をどう位置づけていくのかについて、議論をきちんとすべきである。」と意見している。早稲田大学の事例から、海外からの留学生が果たす役割について、グローバル人材の育成という視点から考えてみたい。

それぞれの大学には、「建学の理念」と、目指す教育・研究・社会貢献に関する目標があり、早稲田大学の場合には、「学問の独立」、「学問の活用」、「模範国民の造就」が「建学の理念」である。早稲田大学総長大隈重信（当時）は、1913年の創立30周年記念式典において、以下の演説をしている。まず、「早稲田大学は学問の独立を本旨と為すを以て、之が自由討議を主とし常に独創の研鑽に力め以て世界の学問に裨補せん事を期す」と述べ、「自主独立の精神を持つ近代的国民の養成を理想として、権力や時勢に左右されない、科学的な教育・研究」を行っていくべきだとしている（早稲田大学、2025）。

また、「早稲田大学は学問の活用を本旨と為すを以て学理を学理として研究すると共に、之を実際に応用するの道を講し以て時世の進運に資せん事を期す」と述べ、学問は現実に活かすものであること、日本の近代化に貢献するものであることが求められるとした。そして、安易な実用主義ではなく「進取の精神」としての学問の活用を考えるべきであると説いた（早稲田大学、2025）。

さらに、「早稲田大学は模範国民の造就を本旨と為すを以て個性を尊重し 身家を発達し 国家社会を利済し、併せて広く世界に活動す可き人格を養成せん事を期す」とし、豊かな人間性を持った「国民の育成」を目指した（早稲田大学、2025）。また、大隈は「一国の為のみならず。進んで世界に貢献する抱負が無ければならぬ。」と述べており、大隈の意を引継ぎ、早稲田大学では「国民」を「地球市民」として捉えて、国籍を問わず、進んで世界に貢献する学生の育成に努めてきている。1905年には、清国留学生部を設けて、積極的に海外から留学生を受け入れ、その数は5年間で2000人を超えて

いたと言われている（袴田、2024）。

大隈がその時代において、国の枠を越えて「世界に貢献する」ことの重要性を論じたことは、現代のように国境を越える財・サービス・資本・労働力の自由な移動が発生するグローバル化した時代が到来することを見越した上での言動だったと思われる。現代の「地球市民」は、グローバル化した国際社会において、多様性の存在を理解した上で、社会的包摂の重要性を認識して、それぞれのコミュニティで活躍し、社会への貢献ができるグローバル人材だと考える。そして、自身の活躍するコミュニティは、世界平和の実現に取り組む国連かもしれないし、高地に位置するインドネシアのボゴアにあるかもしれないし、海や山に囲まれ自然に恵まれた岩手の田野畑村かもしれない。留学生は、グローバル人材の卵であり、早稲田大学で学ぶ中でグローバル人材として育ち、文字通り国際世界で活躍する人材になってもらうことを想定している。早稲田大学では、年間に8,000人以上の留学生が学んでおり、国内生にとっては留学せず、キャンパスにて国際体験を積む機会が提供できていると考えている。海外からの留学生と国内生は講義教室やゼミ教室のみならず、ICCのイベントなどを通じて積極的に交流を図っていることは、本稿で述べたとおりである。

海外からの留学生と国内生の積極的な交流

グローバルリーダー育成の新たな拠点として「早稲田大学中野国際コミュニティプラザ」に、早稲田大学国際学生寮「Waseda International Student House」（通称 WISH）が、2014年にオープンし、最大 872 人の海外からの留学生と国内生が共同生活を送っている。

WISH は、「日本全国・世界各地から集まった多様な価値観を持つ国際色豊かな学生たちが、共に学び生活することにより、相互理解を深め、グローバル社会で活躍するために必要となるコミュニケーション能力等を涵養するとともに、幅広い人間関係を形成することを期待している。そのため WISH では、社会のニーズに応え得る人材となるため将来に必須となる能力を磨く「Social Intelligence(SI)プログラム」を実

施し、すべての寮生に参加を義務付けており、「世界に貢献する高い志を持った学生」「グローバルリーダーとして歓びをもって汗を流す卒業生」の育成を目指す。（早稲田大学学生生活課学生寮デスク、2025）」ところに特徴がある。SIプログラムは、海外からの留学生と国内生がチームを組み、グループワークを行う中で、創造的課題解決力、コミュニケーション力、多様な知識・経験の獲得を目指すものであり、授業期間中の平日 19 時 00 分～20 時 30 分、週 3 日～5 日を目安に開講しており、寮生には週一回の参加（オンラインでの参加も可能）を義務付けている。

まとめに

海外からの留学生は、大学キャンパスに多様性をもたらし、その多様性は大学や社会の知的創造（イノベーション）の源泉の一つとなっている。そして、この多様性と社会のイノベーションを強く結びつけているものが、異文化理解能力であり、キャンパスにおける留学生の存在は、これを身につけるために役立っており、大学教育の社会的効果を高めるためにも必要とされている。留学生は、国内大学にとって、減っていく国内の 18 歳人口を補う存在という消極的な存在ではなく、文化、宗教、習慣、価値観、言語の面から、大学キャンパスにおける多様性確保の一端を担う貴重な人材であり、その存在が長期的に国際社会にもたらす効果は大きい。

今回、事例として取り上げた早稲田大学では、ICC（異文化交流センター）や早稲田大学国際学生寮（WISH）において、海外からの留学生と国内生との積極的な交流を通じた、異文化理解の促進と、多様性を包摂する社会をつくるための創造的課題解決力・コミュニケーション力の涵養を目指した活動が日々実施されてきている。海外から留学生を受け入れることは、大学教育にとって必要であり、多くの日本の私立大学にとっては、「建学の理念」を実現させるためにも重要な行いだと考える。

【参考文献】

- ・袴田郁一（2024）、120年前の留学生の苦悩とは？、早稲田ウィークリー、2024年4月25日号、<https://www.waseda.jp/inst/weekly/news/2024/04/25/117766/>
- ・吉崎 誠（2013）、グローバル人材養成で注目される国際教養大の挑戦 「大学の国際化」を考える糸口として、「大学の国際化とグローバル人材の育成 UEDレポート2013 夏号」、一般財団法人 日本開発構想研究所、pp.6-19
- ・早稲田大学（2025）、早稲田大学教旨、<https://www.waseda.jp/top/about/work/mission> 2025年6月27日最終アクセス
- ・早稲田大学 学生生活課 学生寮デスク（2025）、Waseda International Student House(直営寮) 国際学生寮WISH、https://www.waseda.jp/inst/rlc/student_dormitory/wish/concept/ 2025年7月14日最終アクセス
- ・Bolli T., U. Renold, M. Wörte (2018), Vertical Educational Diversity and Innovation Performance, Economics of Innovation and New Technology, Vol. 27, No. 2, pp.107-131
- ・Guo, M., Y. Yu1, J. Ye (2023), Cultural Diversity and Regional Innovation: Evidence from China, Growth and Change, Wiley, DOI 10.1111/grow.1270
- ・Hu, H., G. Yua, X. Xionga, L. Guoc, J. Huang (2022), Cultural Diversity and Innovation: An Empirical Study from Dialect, Technology in Society, Vol.69 101939
- ・Inter-cultural Communication Center (ICC) (2025), About ICC, <https://www.waseda.jp/inst/icc/about/service/>, 2025年7月14日最終アクセス
- ・Jones, G., B. Chirino, J. Wright (2020), Cultural Diversity Drives Innovation: Empowering Teams for Success, International Journal of Innovation Science, Vol. 12 No. 3, pp. 323-343

- Miller, D. & Z. Acs (2017), The Campus as Entrepreneurial Ecosystem: the University of Chicago, Small Business Economics, Vol. 49, pp.75-95, DOI 10.1007/s11187-017-9868-4

- Ramasamy, B., M. Yeung (2016), Diversity and Innovation, Applied Economics Letters, Vol. 23, No. 14, pp.1037-1041

- Sheik, A., van Rooyen, D., Mazzei, M. (2023), Social Innovation in South Africa: Building Inclusive Economies?", Social Enterprise Journal, Vol. 19 No. 1, pp.1-22. DOI 10.1108/SEJ-07-2021-0060

- Usher, M. & M. Barak (2020), Team Diversity as a Predictor of Innovation in Team Projects of Face-to-face and Online Learners, Computers & Education, Vol. 144, 103702 DOI 10.1016/j.compedu.2019.103702

- Zhang, G., C. Tang, Y. Qi (2020), Diversity and Innovation Ambidexterity: The Differential Roles of Industrial Diversity, Geographical Diversity, and Functional Diversity, Sustainability, Vol.12 No.3, 1041DOI 10.3390/su12031041